

戦後ナショナリズムにおける愛知国体の役割 ——『中部日本新聞』の言説とイデオロギー操作——

観行 智信*

愛知国体の開催に際して、愛知県内の住民に大きな影響力を有していた『中部日本新聞』は、民衆を束ねてナショナリズムの昂揚を図ろうとする支配層の意図を反映させた言説を展開した。そして、その言説を通じて、当時の支配構造に対する下からの自発的同意を導き出すためのイデオロギー操作が行われ、その中で様々な概念・理念の接合が図られた。その操作では、まず、大会への住民動員を図るためにスポーツや国体を「新しい社会に適したもの」「よいもの」として位置づけ、それによって「善意と奉仕」による住民の主体的な大会関与を作り出そうとした。次に、その言説の中では、「健全な文化としてのスポーツ」－「民主主義社会」－「象徴天皇」という3つの概念・理念の接合が図られ、その接合過程を通じて自発的同意を作り出そうとしており、その媒介項として「フェア・プレイのスポーツマン・シップ」が置かれた。さらに、このような自発的同意を作り出す過程の中で、スポーツの熱狂を戦後ナショナリズムの昂揚につなげるために、戦後の支配構造に適合した「国体」意識とそれに基づいた「国体」ナショナリズムが「平和」と「民主主義」を媒介に作られた。

キーワード：愛知国体，国民国家，ナショナリズム，天皇，イデオロギー操作，自発的同意

目次

はじめに

1. スポーツ・イベントを通じた国民国家の再建
－愛知国体に関する言説

2. 戦後日本のナショナリズムと愛知国体の開催
－「国体キャンペーン」における言説の強化

おわりに

－『中部日本新聞』によるイデオロギー操作に関して

はじめに

戦後日本における国内スポーツの再建は、主に国民体育大会（以下、国体とする）を毎年、地方持ち回りで開催することを通じて行われた。その国体の開催状況に関して筆者は、拙稿

において¹⁾、1950年に愛知県で開催された第5回国体（以下、愛知国体とする）が戦後復興・国民国家の再建が図られていた当時の社会状況の中で、当時の支配構造に対する民衆の自発的同意を導き出すための「文化装置」として初めて位置づけられたこと、さらに、大会の開催に地域住民を巻き込む媒体として新聞が大きな役割を果たしたことを明らかにした。

本論の目的は、その愛知国体において、民衆を束ねて下からの自発的同意を導き出すために実際に行われたイデオロギー操作の中身を新聞の言説から具体的に考察することにある。そして、その考察を通じて、どのようにして自発的同意を導き出そうとしたのかということ明らかにし、さらに、自発的同意を作り出す過程と

*立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

関連して、戦後日本のナショナリズムが強化されたことを示そうと思う。

その方法としては、愛知国体に関する言説を、『中部日本新聞』の記事、特に社説を中心に分析する。それは、大会についての『中部日本新聞』の社説が新聞社自身の考え・姿勢を最も良く表しており、さらに、戦後ナショナリズムの昂揚と関わって、その社説の中に権力の意図が映し出されていると考えられるからである。そして本論では、権力によって地域住民が操作された実態よりも、むしろ愛知国体が「文化装置」としてどのように組み立てられたのかということに関して焦点を当てる。

『中部日本新聞』は、愛知県下の新聞の中でも発行部数を含めて愛知県の住民に一番の影響力を有していた新聞だといえる。1947年の購読調査において『中部日本新聞』は、全国4位（4.95%、731791世帯）を記録しており²⁾、さらに1950年9月における『中部日本新聞』の用紙割り当ての部数は、779347部であり、その数はその他の新聞と比べても圧倒的なものだった³⁾。また、当時の新聞社は、割り当てられた用紙以外にも、「センカ紙」を使って新聞を作っており⁴⁾、『中部日本新聞』は、1950年1月1日に100万部を突破していた⁵⁾。それゆえに『中部日本新聞』は、愛知県内において圧倒的な地位を築くとともに、中部地区一円においても、最も大きな影響力を有していた情報媒体であったと考えられる。

そして『中部日本新聞』は、戦前の新聞統合によって作られた新聞社なので地元政界・財界と深いつながりがあり、さらに戦後に行われた新聞の民主化の中で、その体制をほとんど変えなかった⁶⁾。そのため『中部日本新聞』は、体質的に右傾化していたといえるが、1950年7

月から報道関係に対して行われたレッド・パージによって、その傾向がさらに加速された⁷⁾。そしてこの右傾化は、愛知国体においても現われており、秋季大会の際には、天皇・皇后の『中部日本新聞』本社への視察を実現させ、翌年の元旦には、天皇が詠んだ和歌を掲載している⁸⁾。また、『中部日本新聞』は、スポーツを文化事業・販売戦略の一環として位置づけており、中部地区のスポーツ関係者が集まって結成されていた「中部スポーツマンクラブ」と深い関係を築いて県内のスポーツ振興に関わるだけでなく、プロ野球球団「中日ドラゴンズ」を所有し、さらに、1950年3月には週刊『中日スポーツ』を創刊した⁹⁾。それゆえに、『中部日本新聞』の愛知国体に関する記事は、大会関係者や地元政界・財界の影響を受けていたと考えられ、特に、大会に関する地域住民の興味・関心を深めさせる上で、大きな役割を果たしていたと考えられる。

『中部日本新聞』の社説は、愛知国体の開催過程において重要と思われる時期に掲載されているが、その内容は、夏季大会を境に大きく2つに分けられる。夏季大会までの言説では、スポーツ・国体の意義が強調され、大会への地域住民の動員が図られる一方で、全米水上選手権や日米水上大会という重要な国際大会が開催されるにつれて、健全な文化としてのスポーツの側面が一段と強調された。そして、スポーツに対する国民の熱狂を通じて、「平和」と「民主主義」に基づいたナショナリズムの昂揚が図られるとともに、「フェア・プレイのスポーツマン・シップ」の育成というスポーツの理念と「平和的文化国家」としての日本の再建とが接合された。

しかし、夏季大会以降の言説は、「国体キャ

ンペーン」によってそれまでの言説の強化が図られた。「国体キャンペーン」とは、秋季大会に地域住民を巻き込むために行われた強力な宣伝・動員のことであり、実際には、学校における生徒の動員やラジオ・広報などを通じた大々的な宣伝などが行われた。そして、その「国体キャンペーン」において、愛知県下の新聞は、「地域メディア」という特性を活かして、その役割を積極的に担ったのである¹⁰⁾。特に、『中部日本新聞』は、地域住民への大きな影響力と国体関係者とのつながりの下で、それまでの言説の強化を様々な形で図るとともに、それらの言説と「象徴天皇」に関する言説との接合を行った。

それゆえに、本論では、スポーツや愛知国体に関する『中部日本新聞』の社説を分析し、それらの言説を通じて、「スポーツ」・「民主主義」・「天皇」などについての様々な理念・概念が複雑に接合される過程を考察する。そして、それを通じて、自発的同意を導き出すためのイデオロギー操作の状況を明らかにしようと思う。

まず1では、夏季大会までの言説について、開催準備に関する言説や当時の日本国民を熱狂に包んだ全米水上選手権大会と日米水上大会に関する言説、さらに、愛知国体・夏季大会についての言説を分析し、その中で「平和的文化国家」としての日本の再建とスポーツの国際復帰・国体の開催が接合される過程を明らかにする。さらに、その一方で、これらの言説を通じて、スポーツの熱狂と戦前の伝統的ナショナリズムとを断絶させるために、フェア・プレイのスポーツマン・シップの育成が強調されたことや、大会に地域住民を自発的に参加させるために「交歓」としての位置づけが強調されたこと

を示す。

次に2では、「国体キャンペーン」において展開された言説の分析を行い、それらの言説を通じて「交歓」・「行幸」・「健全な娯楽」など様々な要素を強調しながら大会の開催に地域住民を巻き込んだことを明らかにする。さらに、これらの言説の中で、スポーツを通じた「平和的文化国家」としての日本の再建と「象徴天皇」との接合が図られた過程を明らかにし、さらに愛知国体の開催を通じて戦後ナショナリズムの昂揚が図られたことを示そうと思う。

1. スポーツ・イベントを通じた国民国家の再建—愛知国体に関する言説

（1）スポーツ・国体の意義と開催準備への動員

1950年に第5回国体として開催された愛知国体は、1948年5月18日に大会の開催が内定した。『中部日本新聞』では、内定の3日後である5月21日に社説を掲載している。

1948年5月21日社説「第五回国民体育大会の準備」の要約

明朗な運動競技が持つ文化的意義や価値については今更言うまでもないが、このような世相の中でヤミやウラグチのない運動競技こそは、公明・自由・平和で健康な民族再興のために、最も大きな期待をかけてよいものである。しかもそれは、体育や体位の向上だけでなく、知育・徳育をも含めた総合的な成果であり、その意味で愛知国体の開催決定を喜び、我々は、大会が美と力の祭典として真に意義ある成果を収め、これを通じて一般の運動競技に対する理解を深め、この地方の体育向上に大きな貢献をすることを望む。

大会が十二分の成果を収めるためには大会に必要な施設・条件に万全を期す必要があり、諸事窮屈な今日において、それらを完全に整えるために今から最善を尽くして準備しなければならない。

施設として最も必要なものは競技場であるが、高進するインフレの下で資金・資材ともに困難な現状なので、多くの努力と綿密・周到な計画を必要とする。次に、約2万5千人の参加者と約100万人の観客の輸送に関して、県内の広範囲への輸送や宿舎・競技場へのアクセスの問題がある。もし事故や輸送の混乱が起これば、一般市民や観戦者だけでなく、大会の進行にも支障をきたすので、関係者の努力が必要である。宿舎・食糧・衛生・治安などについても万全の準備・用意が必要であり、これを怠れば遠来の客に不屈と不快を与え、大会の成果をそぐことになる。大会の準備は当事者だけではなく、一般の関心と協力が要請され、さらにそれは、大会の開催が差し迫ってからよりも、今から必要である。各方面の熱意と努力が一致して続けられてこそ、初めて2年後の愛知国体は真に意義あるものとなる。

この社説では、まず、運動競技（＝スポーツ）の意義について、明朗なスポーツが、当時の混乱した社会状況の中で、公明・自由・平和という民主主義的要素を含んだ健康で民族再興のためのものとして位置づけられている。そして、この社説の中では、スポーツが新しい社会に最も適合しているものであるとともに、身体の訓練・調教だけでなく、知育・徳育も含めたものとして捉えられている。それゆえに、この言説では、民衆の訓育手段としてのスポーツの側面が強調されており、スポーツを通じて戦後復興を図ろうとする意図が反映されている。さらに、国体の開催意義もこの文脈の中に位置づけられており、大会の成功が「美と力の祭典」としての成果とともに、スポーツの理解と体育向上に求められている。そのために、ここでは、国体というスポーツ・イベントを通じた日本社会の再建の道が強調されているといえる。

また、この社説では、開催準備の問題点について述べられているが、それらは財源の確保と

選手・観客の受け入れ態勢の確立に集約されている。そして、その問題解決については、関係者の苦心・努力とともに、大会に対する一般民衆の関心と協力を求めている。それゆえに、この言説は、大会の開催準備に地域住民を巻き込み、それによって県民・市民の組織化・統合化を図ろうとする開催地域行政の意図が反映されたものであったといえる。そして、実際の開催準備は、愛知県や名古屋市などの開催地域行政を中心に組織された「準備委員会」によって行われ、財源に関しては、地元財界を中心に組織された「後援会」を通じて企業・県民に対する寄付活動が図られたのである¹¹⁾。このような態勢の下で愛知国体の準備は、2年前から着実に進行していったが、その中で、日本全土を沸き立たせ、国内を熱狂の渦に巻き込んだ戦後初の出来事こそが、全米水泳選手権大会における日本人選手の活躍であった。

（2）ナショナリズムの昂揚とその危険性～全米水泳選手権大会に関して

戦後日本のスポーツは、GHQの占領政策の転換に伴って国際復帰の道を進むことになった。マッカーサーは、日本の独立に先駆けてスポーツの国際復帰を積極的に進め、1949年には、各競技団体が次々に国際復帰を果たした。その中でも水泳競技連盟は、国際舞台への復帰を積極的に行い、1949年8月には、ロサンゼルスで開催された全米水泳選手権大会に6人の選手を派遣した。そして、その大会において、古橋広之進・橋爪四郎ら日本人選手は、世界新記録を樹立するなど大活躍し、彼らの活躍は、敗戦によって肉体的・精神的に打ちひしがれて物質的にも窮乏していた日本国民を熱狂させたのである¹²⁾。『中部日本新聞』は、『朝日新聞』

『毎日新聞』『読売新聞』などとともにロサンゼルスに記者を派遣しており、大々的な大会報道を行うとともに、大会に関する社説を3回掲載した。

1949年8月18日社説「驚異の記録成る」の要約

古橋・橋爪両選手が、世界新記録を更新したという快報は、感銘も深く、世界的大ニュースである。この記録は、人間の限界と思われていた以前の記録をさらに短縮したものであり、努力と節制と意欲によって限界以上に人間の能力を高めて人類の進歩に新たな希望を与えたものである。さらに、このような現在の人間能力の最頂点をスポーツという平和的方法によって、我が国の代表選手が世界に示し得たことを我々は喜ぶ。この記録は、敗戦による暗い気分を追い払うものであり、平和的方法ならば、それぞれの能力を自由に発揮でき、さらに世界は快くそれを受け入れてくれることを実証した。古橋選手がこの記録によって人類に希望を与えたように、我が国が平和的文化国家として成長する限り、世界に貢献しうる道は極めて広く、その前途も洋々たるものだろう。この好成績は予期以上であり、選手の健闘を称え、内外関係者の努力を称賛する。

8月20日社説「スポーツ感情を純化せよ」の要約

全米水上選手の活躍は、称賛すべきことではあるが、これを迎える我々の感情については、十分に検討しなければならない。全ての事柄についての感情を純化することは、常日頃心がけなければならないことであり、特にスポーツについてはそうである。スポーツに激しい感情を伴い、観衆がある程度それを露骨に現わすのは自然であり、観衆の熱狂と興奮に応じて競技者の活躍も激しくなることにスポーツの醍醐味があるが、問題は観衆の興奮の内面にある心理である。この心理は、勝敗を別にしてスポーツを純化し、また汚させるのであり、例えば、出場選手の出身地・団体・国などに属する人々が、その選手の勝利を通じて自分の属する団体の優越感を抱くことは、スポーツ感情に不純なものが加わっている証拠である。戦

前・戦中を通じてこの傾向が強く、スポーツは当時の当局者によって愛郷心・愛国心を刺激する道具として悪用されており、現在でもその影響がなくなっていない。競技者が高記録を出して優勝することは、平素の鍛錬によって人間能力の限界にまで達したから尊く称賛されるのである。競技者は、国や団体を背景にしているのではなく、一個の人間として競技場にいるのであり、だからこそスポーツは国際性を持ちうる。選手が属する団体は、優秀な選手を競技場に送り出したこと自体を誇るべきであり、選手が優勝したからといってその団体全体の位置が向上するのではない。これがスポーツに対する純粋な立場であり、選手の活躍と愛郷心・愛国心とを結びつける感情は、本来のスポーツ精神を傷つけ、競技場での選手のフェア・プレイを一般大衆が無意味にしてしまう。これは、すべてのスポーツについても同様であり、平和的文化国家になろうとする我々としては、特に国際競技についてはこの心がけを忘れてはならない。スポーツに対する感情は、国民の文化性の高低を世界に実証するものであり、さらに国際親善のための競技が思わぬ結果をもたらしかねない。彼らの活躍は全世界を驚かせており、我々も全世界のスポーツ愛好家とともに純粋なスポーツ感情を持って称賛すべきである。

8月21日社説「水泳六選手の偉業を称う（ママ）」の要約

日本人選手の活躍に対して、国内が歓喜に沸き立ち、興奮するのは極めて自然である。彼らの活躍は、マッカーサーの激励や国民の声援、関係者の苦心によるものだけでなく、各選手がどのような条件下でも実力を十二分に発揮できるように肉体と精神を作り上げた日ごろの鍛錬によるものである。ニューヨークタイムスのスポーツ記者は、我が選手の勝因に関して①身体が水泳に適している②日本のコーチが米国の技術を十分に取り入れている③水泳に対する情熱④猛練習⑤日常生活におけるスパルタの簡素さと目的達成のための克己心を挙げているが、その中でも猛練習と克己心が中心的位置を占めるだろう。今回の記録は、選手の苦闘と水泳関係者の努力によるものであり、水

上競技界が一層の精進を続け、この刺激によって陸上競技界の躍進が生じたら、スポーツ界に及ぼす影響は大きい。選手の活躍とともに考えるべきことは、単にスポーツばかりでなく、あらゆる文化において、世界に我が国が認められて世界の文化の進歩に貢献するためには異常というべき努力と克己心が必要とされることであり、そのためには、6選手のようなフェア・プレイをもっと終始しなければ世界から信頼を得られない。文化国家建設が安易に取り扱われようとしている時だけに彼らの活躍を称えるとともに冷静に考えなければならない。

これら3つの社説を通じて展開されている言説では、まず、古橋らの活躍が、努力・節制・意欲を通じて人間の能力を極限まで高めた成果であり、しかもそれが、平和的方法による人類の進歩であることが強調されている。そして、この言説では、このような人類の進歩を日本人が果たした意義を強く賞讃しており、彼らの活躍を当時の暗くて混乱して社会状況を打開する一筋の光明として位置づけている。それにより、この言説では、スポーツにおける活躍が日本の再建と接合され、スポーツを通じた日本民族の再興が強調されていると思われる。さらに、この言説では、スポーツを通じた文化の進歩によって世界に貢献することが「平和的文化国家」としての日本再建の道であるとしている。そして、ここでは、特に「世界の中の日本」という側面を強調して「世界—日本」という対立軸を示しながら、自国のナショナリズムの昂揚が図られていると思われる。それゆえに、この言説は、民衆を「平和的文化国家の建設」というスローガンの下に集結させ、それによってナショナリズムの昂揚を図ろうとする意図が反映されたものだったと考えられる。

また、この言説においては、このような文化

の進歩に貢献するためには、努力や克己心だけでなく、「フェア・プレイ」を民衆が身につけることが強調されており、スポーツにおける努力・克己心が一般大衆の日常生活における「規範」として位置づけられている。特に、当時の日本経済は、国家による強力な介入が行われていたにも関わらず、不況やインフレなどによって不安定な状況であった¹³⁾。それゆえに、この言説は、「文化国家の建設」のために国民が丸となって不安定な経済状況を耐え抜くことが強調されていると思われる。

そして、これらの言説を通じて「平和的文化国家」という形でのナショナリズムが図られる一方で、日本国民の熱狂に対する危惧も語られている。この言説では、スポーツを通じて激しい感情が現われるのは自然なことであるとしているが、その時に興奮・熱狂する観客の心理に問題があり、選手の活躍とその選手が所属する集団とを過度に結びつけることを否定している。特に、この言説では、戦前・戦時におけるスポーツを通じた愛国心・愛郷心の昂揚を批判し、人間能力の限界を極限まで高めるというスポーツの意義をさらに強調している。そして、そのような「純粋なスポーツ感情」を持つためには、フェア・プレイのスポーツ精神（＝スポーツマン・シップ）を身につけることが必要であり、そのことが国際競技においてだけでなく、「平和的文化国家」としての日本の再建においても重要だとしている。

このような言説が展開されたのは、この大会に対する国民の激しい熱狂が、あたかも戦前の軍国主義体制における熱狂、つまり戦前におけるナショナリズムの復活のように感じられたからにほかならない。そして当時は、全米水泳選手権大会だけでなく、1949年10月に開催され

た「日米野球」などによっても国民が熱狂しており、そのスポーツへの熱狂を丸山真男は、社会的に分散され潜在していた従来のナショナリズムの意識が発露されたものとして捉え¹⁴⁾、以下のように述べている。

「今日大衆の間で流行をきわめている競馬、競輪その他のスポーツ娯楽の中で、広範囲に軍国的な勝敗観念が『自決』を行っている。オーティス・ケリー氏は、シールズ軍との日米野球を見に行き最初は日本に勝たせたいと思ったが、観衆と選手の態度を見てむしろシールズが勝ったことに喜んだといい、さらに古橋遠征の場合のラジオや新聞、いな日本中の沸き返り方をながめて、『このままでいいのだろうか』と真剣に考えた。平和の道具で「敵前上陸」した気合である』（日本の若い者、283頁）と率直にある危惧を訴えている。つまり、過去のナショナリズムの精神構造は消滅したり、質的に変化したというより、量的に分子化され、底辺にちりばめられて政治的表面から姿を没したというほうがより性格であろう。」¹⁵⁾

このように丸山は、スポーツに対する国民の熱狂に見られた排他的・軍国主義的な感情を従来の伝統的ナショナリズムの発露として捉えている。さらに丸山は、このスポーツへの熱狂が一直線に軍国主義精神の台頭に結びつくものではないが、その非政治的・私的領域でのことが巨大な政治的エネルギーに転化するデリケートな地平が重要だとしており、特に当時の「逆コース」の動きに対する危険性をスポーツの熱狂から読み解こうとしたのである¹⁶⁾。

このようなスポーツの熱狂に対する危機感

なく、吉田茂ら当時の支配層も有していたものであったと考えられる。吉田は、国家の再建と安定した支配構造を形成するために、伝統的権威としての天皇制秩序を復活させようとしていたが、それは、あくまでも現状の支配構造の維持・強化に限られたものであり、戦前体制への復古を完全に否定していた¹⁷⁾。そして、スポーツへの熱狂が戦前におけるナショナリズムの復活につながることは、当時の支配層にとっても望んでいなかったと思われる。特に、戦前・戦時中のスポーツは、軍国主義体制の強化に積極的な役割を果たしており¹⁸⁾、そのような役割を復活させないためにも、スポーツの領域における戦前との断絶を行う必要であったと考えられる。そして、その断絶を強調するために、この言説では、スポーツと「平和」・「民主主義」との接合が図られたと思われる。それゆえに、この言説は、大会への熱狂を軍国主義のエネルギーに転化させないようにする支配層の意図を代弁したものだといえる。

さらに、この言説の中では、戦前との断絶を強調するとともに、スポーツへの熱狂を「非政治的なもの」として位置づけている。特に、この言説の中で強調されている「平和的文化国家の建設」というスローガンは、民主主義・反軍国主義の国家を作ろうという姿勢を強調するために敗戦直後から流布されたものだ¹⁹⁾。それゆえに、この言説は、戦前との断絶を強調しながら文化的なナショナリズムの昂揚を図ろうとする支配層の意図が反映されていたといえる。

そして、翌年に日本で開催された日米水上大会においては、スポーツと結びついた「平和」と「民主主義」の理念を過度に強調した言説が展開され、その中心にフェア・プレイのスポー

ツマン・シップが位置づけられるのである。

（3）フェア・プレイのスポーツマン・シップ に内在していた意味～日米水上大会に関し て

日本国民が熱狂した全米水上選手権大会に続いて、1950年の7月から8月にかけてアメリカとオーストラリアの選手を招待した日米水上大会が全国各地で行われた。そして、名古屋市では、8月24日に日米水上大会・名古屋大会が開催された。この大会は、愛知県の国体関係者にとって、愛知国体・夏季大会の1ヶ月前ということもあり、愛知国体のリハーサルとしても位置づけられていた。この名古屋大会を後援していた『中部日本新聞』は、大会に関する積極的な報道を行い、東京大会が行われた8月4日と名古屋大会が行われた8月24日に社説を掲載した。

1950年8月4日社説「日米水上大会に寄せる」の 要約

朝鮮戦争の最中に平和な国際的スポーツ行事が日本で行われる幸福をかみしめるとともに、その開催意義は大きい。成長している水泳界の現状は、文化・スポーツの健全な発展の形の一つである。競技だから勝つほうが良いが、勝つために手段を選ばないという態度は、スポーツマンが取らないものであり、実力が接近していればいほどフェア・プレイのスポーツマン・シップが望まれる。この点についても世界に誇りうる大会になるものと期待され、さらに観衆や一般国民も勝敗だけに興味を偏らせて、真にスポーツを楽しむ心構えを失ってはならない。この大会は、民衆自らが日米親善を深める好機であり、全国民もフェア・プレイにふさわしい態度をとることが望ましい。特に地方のスポーツ観衆の態度は精練されておらず、低劣なやじや野卑な態度を自粛自戒する必要がある。今大会は市民が接しやすい大会であり、その

感激を一時的なものでなく、他のスポーツや日常生活に活かしてこそ、大会の意義は国民的に高められる。スポーツを見る／聞くことを通じて楽しむのも健全なレクリエーションだが、自らスポーツをする楽しさはそれ以上のものであり、条件の許す範囲で全国民、特に青少年は健やかな心と体を鍛えるべきである。真剣な競技は平和と文化の華であり、動乱の陰でこのような文化的な意欲と努力が白熱したことは後世史家も決して見落とすことができない。選手の健闘を介して両国民の親善と平和の精神がますます深まり、かつ高まることを切望する。

8月24日社説「米濠水上選手に学ぶ」の要約

この大会は、勝敗を競うこと以上に、日米の親善関係の促進に深い意義がある。日本の水泳界は、米濠選手から技術などを学んだが、それ以上に我々は、彼らからスポーツマン・シップを学ばなければならない。勝利そのものをスポーツの究極の目的であると考える人は決して真のスポーツマンではない。この誤った観念こそが、不知不識の間に我々の心の中に潜んでいたものであり、処世の上では、よき市民となるよりも立身出世のみを選ぶことであり、さらに無名の戦いに国を亡ぼす行為にも通ずるものである。米濠選手の立派な態度は、フェア・プレイのスポーツマン・シップに基づくものであり、それを日本のスポーツマンだけでなく、観衆も学び取ることを期待する。下劣なやじを飛ばしたり、グラウンドに入り込んでめちゃめちゃにしたり、帰った後に紙くずを散乱されるといった行為は、本当にスポーツを愛する者がすることではない。スポーツの向上には観衆も重要な一役を担っていることを自覚して観衆自身もスポーツマン・シップを体得することを望む。

この2つの社説を通じて展開されている日米水上大会の言説では、まず、この大会がアメリカとの親善関係を促進させるための国際大会として平和な日本で開催されることが強調されている。それは、この大会の約1ヶ月前（1950年6月）に朝鮮戦争が勃発し、当時の日本国内

にも戦争の危険性が生じていたからである。このような危険性に対して、この言説では、大会自体が日本の平和に基づいた「神聖な空間」であることを強調しているといえる。さらに、朝鮮戦争を境にして日本とアメリカは、早期講和の動きを進め、当時の支配層は、「単独講和＋対米安保＋再軍備」という外交政策を打ち出すことになった。このような状況下で、この言説は、それらの外交政策を擁護するものとなっており、日本の平和がアメリカとの親善・同盟関係の下で成り立っていることを示している。さらに、この言説は、そのような日米関係を強調することを通じて、アメリカの影響下における日本の独立に必然性を持たせようとしていたと考えられる²⁰⁾。

そして、この言説では、スポーツの中心的な価値として位置づけられた「フェア・プレイのスポーツマン・シップ」が強調され、それを国民全体に育成させようとしている。ここで語られているフェア・プレイのスポーツマン・シップとは、「正々堂々と、ルールに違反しないで競い合うこと」であり、「平和」と「民主主義」に基づいた新しい社会を支えるものとして位置づけられたものだといえる。

そして、このような価値観は、GHQによる「スポーツを通じての民主化」という政策に基づくものであった。GHQは、教育の民主化の中でスポーツ中心の体育を奨励し、「民主的人間形成」に基づく「新体育」を展開するとともに、スポーツの普及・振興を積極的に推進した。そして、その中では、スポーツ実践によって育まれるスポーツマン・シップこそが民主主義であると考えられていたのである²¹⁾。特にGHQは、一般大衆の「ものの考え方」そのものを変革させるために、西洋流のフェア・プレイの精

神を理解させることを重要視していた²²⁾。それゆえに、スポーツを民主化の手段として積極的に利用していたといえる。

そして、この言説では、フェア・プレイのスポーツマン・シップを住民に身につけさせるために、勝利至上主義的な観念がその精神に背くだけでなく、立身出世だけを望んで戦争を再び起させるものとして完全に否定しており、純粋にスポーツを楽しむことを重要視している。さらに、この中では、戦前の社会を支えていた価値・理念と民主主義的な価値・理念との違いが強調され、フェア・プレイのスポーツマン・シップを日本国民が身につけることによって理想的な社会が実現できるとしている。

だがその一方で、ここで呈示されているフェア・プレイのスポーツマン・シップは、民主社会において秩序に従うという意味に限定されたものであったといえる。この精神は、現状のルール、つまり社会秩序を守ることには主眼が置かれており、そこには受動的で従順な国民・市民像が描かれている。そして、このような民衆の姿こそが、この言説で呈示されている「よき市民」であり、現存の秩序に自発的に同意して秩序の維持・安定に積極的に貢献することが、社会に適合した民衆の姿であることが強調されているのである²³⁾。さらに、GHQは、スポーツの民主的な側面を強調することによって、政治的不満を解消するための「安全弁」としてスポーツを利用していた。そして、当時の支配層は、不安定な状況下において、健全な文化としてのスポーツに民衆の興味・関心を集中させることによって、「ガス抜き」を図ろうとしていたのである²⁴⁾。それゆえに、この言説を通じてフェア・プレイのスポーツマン・シップが強調される裏には、現存の支配秩序に自発的に同意する

社会意識を作り上げ、さらに当時における民衆の社会的不満を解消させようとする支配層の意図が隠されていたと考えられる。

そして、このような側面は、特に観衆の態度に対する批判の中で示されている。この言説では、地方における観戦者の態度の悪さを「精錬」するために、観戦マナーを守ることが強調されており、それがフェア・プレイのスポーツマン・シップを身につけることであるとともに、文化の進歩であるとしている。ここで描かれている観衆の理想像は、まさしく国家の再建に従順に貢献しようとする民衆の姿であり、さらに、支配秩序の維持・強化に貢献する文化こそが「健全な文化」として位置づけられているといえる。また、この言説の中では、健全な文化・レクリエーションとして「スポーツをする」ことが奨励されている。そして、市民の主体性は、日常生活におけるスポーツ実践や大会への住民の自発的関与など、現実政治から離れたところに求められたと思われる。それゆえに、市民の主体性は、現存の「規範」を守ることが前提とされており、その主体的な実践は、「文化国家の建設」に従順に行うことにほかならなかったと考えられる。

このように日米水上大会に関する言説では、新しい日本社会の形成に民衆が関わってくる一つの形態としてのスポーツ・イベントが描かれており、フェア・プレイのスポーツマン・シップという理念を通じて、現存の支配秩序に適合する健全な文化を市民が自発的に創造することが強調された。そして、これらの言説は、当時の支配構造に関する下からの自発的同意を導き出そうとする当時の支配層の意図を代弁したものであった。さらに、ここで描かれている受動的な市民像は、「平和的文化国家の建設」に自

発的に貢献しようとする個人の姿を表していたといえる。そして、愛知国体に関する言説は、これらの言説を土台にして展開されたのである。

（４）フェア・プレイの発揚と「交歓」としての愛知国体～夏季大会に関して

そして、1950年9月には、愛知国体・夏季大会が開催された。『中部日本新聞』は、夏季大会の開幕日である9月21日に社説を掲載した。

9月21日社説「第5回国体を迎えて」の要約

国をあげての最高の体育祭典である国体が開幕する。愛知国体は、過去最大のものであり、多くの困難を乗り越えて開催にこぎ付けた関係者の努力は大きかったが、県民がそれに参加したことを忘れることはできない。それだけに、これらの苦心と努力が実を結び、愛知国体がスポーツ史上に長く輝くものとなるために、大会運営についても一層の努力を望む。しかし、この大会を成功させるためには、社会一般が大会の意義を心から理解し、その運営に協力することが不可欠である。第1回から経済的・社会的混乱の中で開催され、しかも朝鮮戦争の最中に開催される愛知国体は、スポーツの再建だけでなく、スポーツマン・シップとフェア・プレイの精神を養い育てることによって戦後退廃した社会一般の風潮を是正し、我が国の復興に資そうとするものである。全国の若人を一堂に会して大会は開催されるが、スポーツの喜びと楽しみは、記録とともにフェア・プレイの精神の発揚にあり、そのことを忘れたら、大会は単なるお祭騒ぎに終わってしまう。そして、オリンピックへの復帰が許された現状においては、立派に堂々と闘える心構えを育成することも大会の使命である。

だが、この大会は、また善い意味でのお祭でもあり、日本中の人々が毎年どこかに集まって競技を通じて交歓し、観衆もまたスポーツの醍醐味と神髄にふれるという点で最大のレクリエーションでもある。そして、国体はスポーツの普及・向上

を狙ったものであり、国体終了後の施設の活用には十分考慮すべきである。また、国をあげての最大の交歓である以上、地元愛知県としては集まる人々に喜びと満足を与え、少しでも不快や不満の念を招かぬようにすべきである。特に、国体会場の市や町には相当の金が落ちると思われるが、商売を重視するのではなく、遠来の客に対する善意と奉仕こそが大会に求められ、関係者・県民の協力した奉仕によって大会が立派な成果をあげることが切望する。

夏季大会に関する社説では、まず、愛知国体が県民全体の力によって開催されることが強調され、開催準備についての言説と同様に、大会への住民の自発的な参加を導き出し、その開催を通じて県内の一体感を作り出そうとしている。そして、愛知国体の開催意義については、日米水上大会の時と同様に、スポーツの分野を超えて地域住民がフェア・プレイのスポーツマン・シップを身につけ、それによって戦後退廃した風潮を是正し、社会自体の復興に貢献することが強調されている。特に、この言説では、国内最高の祭典としての国体の歩みとスポーツの国際復帰、さらには日本の戦後復興とを重ね合わせており、戦後スポーツの復興と国民国家としての日本の再建が接合されている。また、日米水上大会後に日本のオリンピックへの復帰が決まったこともあり²⁵⁾、この言説では、世界と戦うための心構えとしてフェア・プレイのスポーツマン・シップを身につけることが一段と強調されている。さらにここでは、住民がその精神を忘れると大会自体が単なる「お祭り騒ぎ」になるとしており、そこには、大会の開催を住民の訓育手段として活かそうとする意図が反映されていたと思われる。

しかし、この言説では、一方で「お祭り騒ぎ」を否定しながら、この大会が「よい意味でのお

祭り」であり、日本中の人々との最大の「交歓」・レクリエーションの場であることが強調されている。そして、この言説では、愛知県に集まる人々に対して住民が「善意と奉仕」で応えるために、大会に積極的・自発的に参加することを要請している。さらに、この言説では、多くの人々との交流によって得られる「交歓」としての楽しみが強調されているが、このような楽しさは、当時のスポーツに含まれていたアマチュアリズムに基づいたものだったと考えられる。

アマチュアリズムとは、スポーツ実践を「楽しむためのもの」「レクリエーション」として位置づけ、スポーツを通じて社交的な雰囲気を作られることを重要視したものであった²⁶⁾。そして、この理念は、当時のスポーツマンがフェア・プレイとともに守るべきものとされており、特に、人々が集まって「ともに楽しむこと」を強調する一方で、勝利至上主義や商業活動を否定したものであった。それゆえに、当時の支配層は、スポーツと政治・経済とのつながりを隠して健全な文化としてのスポーツを強調するために、この理念を利用したと考えられる。

そして、この言説では、このようなアマチュアリズムの理念を強調するために、地域住民に「善意と奉仕」を求めている。特に愛知国体においては、地域住民と選手・役員・観客との直接的な接触の場が、競技会場や駅・宿舎以外では、商店街における商売を通じた接触であった。それゆえに、この言説を通じて、商売よりも「善意と奉仕」を重視させ、それによって住民のボランティア精神を上から作り出そうとしたと思われる。特に、このような試みは、県内全体を愛知国体に巻き込もうとする地元行政・財界の意図にも沿うものであったと考えられる。

また、この言説の中では、愛知国体をレクリエーション大会としても位置づけるとともに、大会後の施設活用の問題について取り上げている。だが、これらの言説は、愛知国体が地域住民のための大会として開催されていることを強調したものだったといえる。

このように夏季大会までの愛知国体に関する言説では、その開催意義について、フェア・プレイのスポーツマン・シップを地域住民に浸透させることが強調されている。そして、当時のスポーツは、平和的方法として人間の能力の限界に挑戦するという意味で新しい社会に最も適合している「健全な文化」として位置づけられていた。それゆえに、この言説を通じて、スポーツ実践を通じたナショナリズムの昂揚が図られたが、それは、戦前のものとは違うものであることを「平和」と「民主主義」の理念を通じて強調しており、「平和的文化国家の建設」というスローガンを通じて国民を統合させようとする支配層の意図が反映されてものであったといえる。そして、これらの言説では、健全な文化としてのスポーツの中心理念として、フェア・プレイのスポーツマン・シップが位置づけられたが、その精神は、支配秩序を維持・強化する役割と接合されたものであった。それゆえに、この言説におけるフェア・プレイのスポーツマン・シップは、当時の支配構造に対する自発的同意を導き出すための重要な構成要素となっていたと考えられる。さらに、夏季大会までの言説では、大会への住民動員との関連で、愛知国体の「交歓」「レクリエーション」としての側面が強調されているが、それは、地域住民の大会への自発的な参加を作り出し、愛知国体の開催に県内全体を巻き込もうとするものであ

った。結局、これらの言説を通じて、「スポーツ」－「民主主義」との接合が行われ、それによって愛知国体は、当時の国民国家・地方行政に対する下からの自発的同意を生じさせる「文化装置」として位置づけられたのである。

2. 戦後日本のナショナリズムと愛知国体の開催－「国体キャンペーン」における言説の強化

愛知国体・夏季大会は、これらの言説が展開された中で1950年9月に開催されたが、少ない観衆や運営の不備などによって大会自体は失敗に終わった。これに対して国体関係者は、秋季大会を成功させるための「国体キャンペーン」を展開した。特に『中部日本新聞』は、地域住民に愛知国体に関する認識を深めさせ、さらに県内全体を大会に巻き込ませるために、重要な役割を果たした。『中部日本新聞』では、地域に密着した国体報道を行うとともに²⁷⁾、秋季大会の開催までに合計3回の社説を掲載した。そして、その中では、夏季大会までの言説をさらに強化するとともに天皇の「行幸」に対する言説も積極的に展開し、その両者の接合が行われた。さらに、これらの言説を通じたイデオロギー操作と関連して、戦後日本のナショナリズムが強化されたのである。

（1）「交歓」の場としての商店街

まず、秋季大会の前売り入場券の発売日である10月7日に社説を掲載し、その中で以前に展開された言説の強化が図られた。

10月7日社説「国体を成功させるには」の要約

20日後には、わが国最高のスポーツの祭典である国体秋季大会が豪華に繰り広げられる。施設の

整備・輸送・宿泊などで評判の良くなかった夏季大会の検討・改善が加えられているが、関係者の周到な準備と緊密な協力がなければならない。国体の目的はスポーツの普及と振興にあるが、同時にそれが全国各地の人々が交歓し親善を促進するよい機会であることを見逃してはならない。受け入れ態勢の不備や国体に対する県民の関心の薄さ、協力的態度の無さは、関係者や一般国民がともに国体のこうした意義に対する認識が不十分だったからである。我々は、関係者が国体を自分達だけの仕事であって、県民をこれに協力させるといった考え方を改めることを望む。そして、一般県民に対しては、高い水準の競技を通してスポーツの醍醐味を味わってレクリエーションの一助にするのと同時に、親切と奉仕を持って全国各地から集う人々との交歓の実をあげるための積極的な気構えを望む。天皇・皇后の臨席の下で行われる国体を盛大に意義あるものにするには、大会が関係者だけのものでなく、広く県民が自分自身のものであることを認識することが必要であり、関係者と一般県民が国体気分を盛り上げるために、大会までの時日を最も有効に活用することを望む。

この社説では、まず、夏季大会の失敗について、その原因を住民が国体の目的・意義を理解していなかったこと、特に「交歓」としての認識が不十分だったことに求めている。そして、この言説では、単に国体に理解・協力するだけではなく、積極的・自発的に参加することを住民に要請しており、そこには、地域住民を愛知国体に主体的に関与させようとする国体関係者の意図が反映されている。

さらに、この言説では、このような地域住民の動員を導き出すために、「交歓の実をあげる」価値が強調され、天皇・皇后の出席もこの文脈に位置づけられている。そして、『中部日本新聞』は、この社説以外の記事において、商店街を「交歓」の具体的な場所として位置づけ、名古屋市の商店街の動きに焦点を当てている。

同日『中部日本新聞』の「今度こそは大歓迎国体に商店街起つ」という記事には、名古屋市内の商店街が“名古屋娘”を選んで、夏季国体の時の失敗を取り戻そうとしている状況と秋季大会に向けた商店街の特別な体制作りについて述べられている²⁸⁾。この記事の背景には、名古屋市の商店街が夏季大会の際、商店街連盟と商店街連合会との対立から国体協賛行事をしっかりと行えなかったことがあった²⁹⁾。そして、この協賛行事の失敗は、夏季大会における住民の態勢作りの失敗を象徴したものだったといえる。それゆえに、この記事は、失敗を繰り返さないために、秋季大会に向けて行政・商店街・住民が一致団結したこと示すものだったと考えられる³⁰⁾。そして、秋季大会が近づくにつれて、商店街が「交歓」の場となるように、競技会場では、駅と商店街を中心に華やかな装飾が飾られ、国体のマークが入った「国体みやげ」が売られるとともに³¹⁾、選手・役員に対する割引が行われたのである。

このような「交歓」としての愛知国体の側面は、遠来の選手・関係者などに対してだけでなく、これ以降の言説では、天皇・皇后に対しても用いられた。そこでは、天皇に関する言説と愛知国体に関する言説との接合が「民主主義」を媒介に図られていくのである。

（２）天皇・皇后の国体出席に含まれた社会的意義～スポーツ－民主主義－天皇の接合

さらに、秋季大会開会式の１週間前となる10月20日には、社説が掲載された。そこでは、天皇・皇后の開会式への出席や『中部日本新聞』本社への天皇・皇后の「御視察」を歓迎するとともに、その意義が述べられている。天皇・皇后の秋季大会開会式への出席は、10月5日に

正式決定されていたが、その後、具体的な日程と行動内容が決まり、国体出席に関連して様々な施設の視察が行われることになった。

10月20日「両陛下をお迎えする喜び」の要約

両陛下が国体秋季大会開会式に出席した後、様々な施設を見学する。陛下は1946年10月に名古屋市に来ており、国の象徴としての陛下を拝して我々は我が国を民主的に再建するために決意を一層強くした。陛下は、かつての皇室中心主義時代の陛下ではなく、親しみ深い慈愛にあふれた人間的な陛下であり、再びお迎えする喜びは大きい。名古屋市も着々と復興しており、我々は陛下にこうした復興の実情を見せたいと思う。

国体関係者や選手にとって、国体に天皇が来る喜びは大きい。地方で開催される国体に両陛下が来るのは初めてであり、それは、国の将来を担う若人たちに新たな希望を与えて激励しようという心によるものである。こうしたことを考えても、この大会が模範的な成果をあげることに一層努力を傾けなければならない、それは、出場者・主催者・競技を開催する都市だけでなく、観覧者にも望まれる。このような輝かしい晴々とした空気のなかで行なわれるこの大会の内容が運営についても競技そのものについても少しの暗い影をも残すようなことがあってはならず、勝敗も記録も大切だが、それよりも重大なのは公正な競争によって日ごろの鍛練の成果を発揮するという出場選手たちのスポーツ精神によって貫かれていることである。夏季大会において好ましくない行動が問題となったが（筆者注：夏季大会のヨットで岐阜県選手の替え玉事件が起きており、これを指していると思われる³²⁾）、これは、勝敗だけに囚われてスポーツの精神を体していないためであり、それに類したことが繰り返されるようなことがあれば折角の両陛下の御厚志にも沿い得ないこととなり、オリンピック参加への道も閉ざされることになるかも知れない。主催者側は運営に万全を期し、細心の注意を必要とし、出場者が快くその実力を発揮できる条件が整えられなければ、この大会も理想的なものとはなりえず、この大会をスポーツ史上

に永く記念すべきものとすることは、両陛下をこのためにお迎えにしたことに意義を活かすことにほかならない。

その上に感激にたえないことは天皇・皇后の中部日本新聞社への視察の内定である。戦後に天皇・皇后がお揃いで新聞社を視察するのは初めてであり、これは民主社会の建設に大きな役割を果たしている新聞の使命を天皇・皇后が認め、それに関心を払っているからであり、我が社の視察を通じて一般の民主社会建設の熱意を高めようという心に基づくものである。本社の喜びは大きく、光栄である。

この社説では、まず、天皇に関する見方が示されている。そこでは、現在の天皇が戦前における天皇とは違って民主主義社会の建設を望んでいる「象徴天皇」であり、さらに、親しみ深くて慈愛のある「人間天皇」としての側面が強調されている。そして、ここでは、天皇と民衆との民主的な結合関係が明示され、それによって象徴天皇と民主主義社会との親和性が作り上げられている。それゆえに、この言説は、伝統的権威としての天皇制秩序を政治的に利用しようとした当時の支配層の意図を擁護するものであったといえる³³⁾。

しかしその一方で、この社説では、天皇・皇后が揃って名古屋市にやって来ること、特に天皇が名古屋市の復興状況を「見る」だけでなく、市民がその状況を天皇に「見せる」ことに大きな意義を見出している。つまり、この言説の中には、天皇と民衆との「見る／見られる」という視線・視角が内在しており、その視線・視角は、戦前に形成されていたものが、戦後の天皇の「行幸・巡幸」を通じて再現されたものだったといえる。それゆえに、この言説には、「見る／見られる」という視線・視角を生産・再生産させ、さらに天皇と民衆との直接的な接触を

通じて天皇制秩序を体現させようとする意図が反映されていたと思われる。そして、これらの言説を通じて愛知国体は、天皇と民衆との関係性を再構成する場・空間として位置づけられたと考えられる³⁴⁾。

次に、この言説では、スポーツ・イベントである愛知国体に天皇・皇后が来ることの意義が強調されている。愛知国体は、初めて天皇・皇后が揃って国体のためにやって来る大会であり、それゆえに、「模範的な成果」を上げるために出場者や関係者だけでなく、観衆にも協力と努力が求められ、天皇・皇后を迎えた愛知国体を「最高の祭典」として位置づけようとしている。そして、この言説の中では、大会を成功させるために勝敗だけに囚われないようなスポーツ精神、つまりフェア・プレイのスポーツマン・シップを育成させることが強調され、しかもそれが、天皇の「御厚志に応える」ことだとしている。それゆえに、この言説では、フェア・プレイのスポーツマン・シップを媒介にした天皇と新しい民主主義社会との親和性が強調され、それによって当時の支配秩序と「象徴天皇」との必然的な結びつきが示されていると思われる。

さらに、この言説の中では、スポーツを通じて国家の再建を天皇が望んでいるものとしており、現存の支配構造に自発的に同意することが天皇の意向に沿うことだとしている。特に、この言説では、「文化国家」としての日本の再建と天皇とが接合されており、新しい民主社会の建設のために天皇と国民が一体となっていることが強調されている。それゆえに、この言説は、戦後改革を通じて形成された「天皇制民主主義」に対する自発的同意を導き出そうとする意図を代弁していると考えられる³⁵⁾。そして、現存の

支配構造に適合した社会意識を民衆に植えつけるために、「平和」と「民主主義」の追求による国民の幸福という論理が過度に賞讃されていると思われる。

さらに、この社説では、天皇・皇后が『中部日本新聞』本社を視察することについて、「民主主義」を媒介とした天皇と新聞社とのつながりが強調されている。そして、この言説は、天皇の意向に沿って「民主主義」に基づいた新しい国家が再建されていることを示すとともに、新聞がその再建に主体的に関与していることを強調している。

このように秋季大会に向けての言説では、「スポーツの精神」と「平和・民主主義の理念」と「象徴天皇」との関係が相互に強化されており、この3つの要素が接合された形の言説が主張されている。その中でも特に、民主主義社会の「規範」としての天皇の位置づけが強調されており、また、天皇・皇后が国体に来る意義を強調することによって、大会自体の意義が高められているのである。さらに、これらの言説を通じて、愛知国体は、「地域の祭り」としてだけでなく、日本全体にとっての「祭り」として位置づけられている。そして、天皇・皇后が出席した国内最大の「交歓」としての側面を強調することによって、大会への住民の主体的・自発的な参加を促そうとしたと思われる。

このように秋季大会の開幕までに強化された愛知国体に関する言説は、その他の記事でも強化・補完された。10月23日には、秋季大会の概要についての大きな記事の中で、愛知国体の実行委員長である浅井竹五郎が「大きな夢を実現する日」という文章を書いている³⁶⁾。さらに10月25日には、国体委員長である東龍太郎の「愛知国体に寄る」という記事が掲載されてい

る³⁷⁾。その両者の記事では、スポーツを通じた国家の再建と天皇との親和性を強調し³⁸⁾、戦後スポーツの一つの到達点として愛知国体の開催を位置づけている。

そして、これらの言説を通じて大会への地域住民の自発的な参加が導き出され、それによって秋季大会は盛大に開催されたのである。

（3）「国体」ナショナリズムと秋季大会

このような経過を経て10月28日には、秋季大会が開幕した。『中部日本新聞』は、この日に秋季大会と天皇の「行幸」についての社説を掲載し、それまでの言説を補完・強調している。

10月28日社説「奉迎の言葉」の要約

両陛下の御視察を本社は喜ぶ。天皇・皇后がお揃いで新聞社を視察するのは、天皇が神格者ではなく、国民統合の象徴としての新しい立場になっているからである。国民の喜び／悲しみを天皇の喜び／悲しみとし、天皇と国民とを遮るものはない。我が国の民主的な建設を念願としている天皇が新聞視察に関心を持たれるのも自然の理である。新聞は、民主社会の建設を使命として極めて効果的にその役割を果たすものであり、ここに民主的な陛下と新聞事業との結びつきがある。そして、この地域で広範に民衆と結びついている本社を視察する事により、陛下に対する民衆の親近感は一層強まる。本社は、民主社会の建設のために全力を尽くすが、それは両陛下の心にも沿うことである。

同日社説「国体の開幕」の要約

国体が回を重ねるごとに、施設を整備し、競技も充実していく事実は、敗戦から立ち直りつつある我が国の現実を反映するものである。朝鮮戦争以来、国際情勢が激動している最中に、我が国で国体が盛大に遂行できるという意義を特に強調したい。さらに、ルールに従って日ごろの成果をフェアに競いあうスポーツの精神こそ、民主社会建

設の原動力となるべきものであり、西欧民主主義陣営に属する我が国においてますますこのスポーツ精神を奮い起こす必要は大きい。だからこそ、この国際情勢のなかで国体が華々しく開かれるのであり、国体が見事な成果をあげることは、単にスポーツに限らず、我が国すべてについて国際的信用を高めることになる。国体は出場選手が郷土の名誉をかけて勝敗を競い合うばかりでなく、一般の民衆にとっても極めて大きい意義を持っており、愛知県下の民衆はもとより全国民の関心は国体に集中している。それは民衆の関心を最も民主的なスポーツに集中して、レクリエーションを兼ねつつ、民主社会建設に活力を与えるという大きな効果を持っているからである。しかし、盛大な国体が開催できるまでに日本は立ち直ったが、社会状況は、廃退の傾向から脱していない。不健全な娯楽は横行し、悪質犯罪はあとを絶たず、特に青少年の不良化が問題にされている。それに対して、国体のスポーツ精神を通じて新たな民主的活力を社会に吹き込むことば、この傾向を是正するのに大きな効果があるだろう。若人はフェアな取組によって成果をあげ、オリンピックへの参加の道を自ら切り開く。さらに、そのことは民主社会建設に大きく寄与するだろう。我々は、国体の成功を心から祈る。

前者の社説では、まず、天皇に関して、戦前と戦後における天皇の違いが強調されているが、それとともに、天皇と国民との心情的なつながりについても強調されている。そして、ここでは、「象徴天皇」と国民との新しい関係に基づいた一体感が示されている。さらに、新聞社と天皇との関係については、「民主社会の建設」に基づいた必然的な結びつきが強調されており、また、この言説を通じて、愛知県内の新聞社の中で『中部日本新聞』が天皇に選ばれた新聞社であることが強調されている。それゆえに、この言説には、天皇・皇后の「巡幸」を通じて、天皇と地域住民との新しい関係を築いて

地域の組織化・統合化を図ろうとする意図が反映されていると考えられる。さらに、この言説には、特に、それらの意図を『中部日本新聞』が積極的に担おうとしている状況が見られる³⁹⁾。

さらに後者の社説では、「平和の祭典」としての愛知国体の位置づけが示されるとともに、日本が西欧民主主義社会の一員であることが強調されており、それによって日本の「反共」としての立場がより明確化されている。また、この言説では、それまでの言説と同様にフェア・プレイのスポーツマン・シップが強調されているが、その強調を図る際に、スポーツの対立項として「不健全な娯楽」—具体的なものとしては、ギャンブルを想定していると考えられる—を位置づけている。そして、ここでは、そのギャンブルを否定することによって、民主主義社会の建設と治安維持に積極的に寄与する「健全な文化・娯楽」としてのスポーツを強調しているのである。特に、1950年当時は、八百長疑惑などによって競輪・競馬などのギャンブルは、住民から非難されていた。それゆえに、この言説は、ギャンブルの否定を通じて、スポーツに対する住民の好意をさらに引き出し、それによって大会への自発的な参加を促進させようとしたものだったと考えられる⁴⁰⁾。

そして、このような言説が展開される中で愛知国体・秋季大会は競技会場が連日超満員になって開催された⁴¹⁾。特に、秋季大会の開会式は激しい熱狂に包まれ、その情景は、現在まで語り継がれている。

「かくて迎えた10月28日、秋季大会開会式場に当てられた名古屋市瑞穂陸上競技場は、走路際まで観衆が詰めかけ7万人をのんだ。

両陛下ご到着の9時53分までには立すいの

余地のない位の状態となった。1万5千名の入場行進がはじまり、それぞれのフィールドに整列し終わると、式典要項にはなかったが、炬火をかかげた女子ハードラー米陀京子が颯爽と走りこんだ。大会旗が前回の東京から持ちこまれ、国旗があがり、君が代が斉唱される頃となると、大会のふん囲気（ママ）は最高潮に達した。その感激を、天野貞祐文部大臣は、『われら、兄弟姉妹よ、国歌を高らかにうたい、国旗をかかげる。何たる感激ぞや』と名演説を披露。会場7万人観衆はこの式典に酔った。

両陛下が競技場からお帰りになるのに、競技場の競争路を通られたが、これが7万人の共感を呼び開会式場は、万歳、万歳の声に包まれた。」⁴²⁾

この言説に見られる情景は、当時の関係者にとっては「感動のシーン」であり、その中でも、特に天野文相の演説は、開会式の参加者に深い感銘を与えた⁴³⁾。そして、ここで語られている情景こそが、『中部日本新聞』の言説を通じて作ろうとしていた愛知国体の理想の姿、つまり、権力関係を生産・再生産するための「祝祭」の場・空間であったといえる。さらに、このような天皇を中心として国旗掲揚や国家斉唱が行われている開会式の情景は、まさしくスポーツ・イベントを通じて戦後日本のナショナリズムが昂揚している状況であり、また、戦後の国家意識が発露されたものだったと考えられる⁴⁴⁾。

先述したように、丸山真男はスポーツの熱狂を通じて伝統的ナショナリズムが復活する危険性を明らかにしたが、彼がその中で捉えていたものは、戦前において形成され、敗戦によって社会構造の底辺に分散的に潜在されていた国民の国家意識であった⁴⁵⁾。そして、この国家意識こそが、天皇制国家としての「国体」意識（以

下、国民体育大会＝国体と区別するために「国体」とする）だったといえる。その「国体」意識は、戦前において「立憲君主制」と「家族国家」という2つの前提に基づきながら、その両者を「現人神」としての天皇によって一元化したものだった⁴⁶⁾。

そして、その「国体」意識は、戦後における日米の談合によって形成された「天皇制民主主義」によって存続したのであり⁴⁷⁾、戦後の「国体」意識は、先の2つの前提に基づきながら、戦後の支配構造に適合したものと作り替えられたといえる。そこでは、天皇と民衆との関係性が、両者の「見る／見られる」という視線・視角を土台にした「心情的なつながり」によるものとして位置づけられたのである。さらに、この「国体」意識は、戦前における「権力者」としての天皇を否定するために、「平和」と「民主主義」の理念を媒介にして再構成され、戦前との断絶を強調するものとなったと考えられる。

さらに、当時の支配層は、スポーツに対する国民の熱狂を政治的エネルギーとして利用するために、戦後の「国体」意識に基づいたナショナリズム、つまり戦後型の「国体」ナショナリズムの強化を図ったと思われる。そして、国体というスポーツ・イベントは、「象徴天皇」と「民主主義」とを結びつける上で最も適していた場・空間であるとともに、戦前との断絶を強調した戦後型の「国体」ナショナリズムを強化しやすい場・空間だったと考えられる。そして、1950年の愛知国体は、当時としては最大の祭典であっただけでなく、天皇・皇后が公式に出席する初めての大会でもあった。それゆえに、愛知国体は、支配層に積極的に利用され、『中部日本新聞』は、それらの意図を代弁するため

に、住民の動員を積極的に行いながら「民主主義」「フェア・プレイ」「象徴天皇」などの概念を組み合わせた言説を展開したのである。そして、その言説を通じて、権力に対する下からの自発的同意を導き出すためのイデオロギー操作を行ったが、その過程と関連して戦後型の「国体」ナショナリズムの強化を図ったのであり、そのクライマックスが秋季大会の開会式だったといえる。

しかし、このナショナリズムは、その土台に天皇が残存している一方で、その昂揚を図るために戦前との断絶を強調する必要があった。そして、そのことは、戦前の「権力者」としての天皇を自らが否定していくことにほかならなかったといえる。それゆえに、愛知国体などを通じて生成・強化された天皇と民衆についての社会意識は、1950年代の「逆コース」の動きに対抗する意識につながり⁴⁸⁾、さらに1950年代後半から形成された「企業支配」を支える「大衆天皇制」の土台になっていったと考えられる⁴⁹⁾。

このように「国体キャンペーン」によって強化された愛知国体に関する言説は、地域住民の大会への動員をさらに強化し、「フェア・プレイのスポーツマン・シップの育成」と「民主社会の建設」、さらには、「伝統的権威としての天皇」という概念が互いに接合され、それによって、当時の支配構造における自発的同意を導き出そうとする支配層の意向を反映したものとなった。そして、これらの言説では、「平和的文化国家」としての日本の再建が天皇の意向に沿うものとして位置づけられるとともに、戦後の「国体」意識に基づいた、戦後型の「国体」ナショナリズムの昂揚が図られた。そのナショナリズムは、戦後の支配構造に適合したものであり、

天皇と民衆との心情的な関係を土台にしながら「平和」と「民主主義」によって戦前との断絶を強調したものだといえる。

おわりに

一 『中部日本新聞』によるイデオロギー操作に関して

1950年の愛知国体は、戦後復興・国民国家の再建が図られていた当時の社会状況の中で、開催地域住民を束ねてナショナリズムの強化を図ろうとする支配層の意図が孕まれながら開催された。そして、地元の行政・財界・スポーツ界と深い関係を持ち、さらに地域住民に対して大きな影響力を有していた『中部日本新聞』は、大会の開催に関わる様々な意図を反映させた言説を積極的に展開し、愛知国体に関する社説を通じて、民衆を束ねて下からの自発的同意を導き出すためのイデオロギー操作を行った。そして、この操作を通じて、民衆は、「スポーツのルールー民主社会の秩序ー伝統的権威としての天皇」という3つの「規範」を自発的に守るものとして位置づけられ、民衆の主体性は、非政治的領域におけるものとして限定されたといえる。さらに、『中部日本新聞』の言説は、当時の支配構造を維持・強化しようとする支配層の意図が反映されていたが、その操作は、大きく分けて3つの側面を有していた。

まず、第一の側面は、これらの操作が、住民の愛知国体への動員戦略としての役割を有していたことである。愛知国体への住民の動員は、開催準備の時から行われていたが、特に「国体キャンペーン」では、実際の住民動員と連携して、言説レベルでの動員が行われた。そして、その言説では、「交歓」「象徴天皇」「健全な娯

楽」などの要素が強調され、それによって、地域住民に愛知国体を「よいもの」「身近なもの」「住民のためのもの」として認識させようとしたのである。特に、当時のスポーツは、「新しい社会に最も適合したもの」として位置づけられていたので、その「健全な文化」としての要素を強調することによって、地域住民の好意的な態度を導き出し、これらの言説を通じて、地域住民の「善意と奉仕」に基づいた自発的な参加を作り上げたのである。

第二の側面は、これらの動員戦略と関連して、自発的同意を導き出すために、言説を通じて「スポーツー民主主義ー天皇」の接合が行われたことである。特に、その接合過程では、スポーツと民主主義社会との関係を「フェア・プレイのスポーツマン・シップ」から強調し、その文脈の上に「象徴天皇」を載せていた。さらに、接合された3つの要素は、様々な言説を通じて相互に強化し合っていた。また、これらの言説を通じて、健全な文化としてのスポーツの発展と国民国家としての日本の再建が接合されたのである。

さらに、第三の側面としては、下からの自発的同意を作り出す過程と関連して、これらの言説が、自国のナショナリズムの昂揚を図るための役割を有していたことである。当時の支配層は、スポーツに対する国民の熱狂を政治的エネルギーとして利用するために、当時の支配構造に適合した戦後型の「国体」ナショナリズムを強化しようとした。そして、この言説では、その意図が代弁され、天皇と民衆との心情的な関係に基づきながらも、戦前との断絶を強調するために「平和」と「民主主義」の理念を前面に押し出した文化的なナショナリズムの昂揚が図られたのである。

本論では、戦後日本のナショナリズムと愛知国体との関連について、戦前とのつながりを中心に考察を行ったために一面的な見方しかできなかった。さらに本論で明らかにした「文化装置」としての愛知国体の位置づけが、戦後日本社会の変化に伴ってどのように変容していくのかということに関しては、愛知国体以降の大会状況と戦後日本の社会状況についてのさらなる考察が必要だろう。

注

- 1) 観行智信「戦後復興・国民国家の再建と国民体育大会—1950年の愛知国体に関して—」『立命館産業社会学論集』第37巻第4号、2002年、173—94頁。
- 2) 山本武利『占領期メディア分析』法政大学出版、1996年、87頁。
- 3) 森可昭『現場の地方新聞論』垣内出版、1987年、111頁。ちなみに、その他の新聞の部数は、『朝日新聞（中部）』204474部、『毎日新聞（中部）』159425部、『夕刊新東海』100261部、『名古屋タイムス』81241部、『東海毎日新聞』55536部、『中部経済新聞』51206部であり（森、同上書、111頁）、『読売新聞』は、東京を中心とした関東地方に地盤が偏っていた（山本、前掲書、1996年、86頁）ために、中部地区での部数は、それほど多くなかったと考えられる。
- 4) 当時の新聞の状況に関しては、山本武利「戦後メディア史」香内三郎・山本武利ら『メディアの現在形』新曜社、1993年、26—57頁、山本武利、前掲書、1996年、新井直之『新聞戦後史』双柿舎、1979年、を参照。
- 5) 『中部日本新聞』1950年1月1日。
- 6) 新聞の民主化によって、全国の新聞社では、急激な体質転換がなされたが、『中部日本新聞』では、社主などを含めて戦前の体質をほとんど変えなかった（中日新聞社『中日新聞創業百年史』1987年、347—51頁）。
- 7) 報道関係に対するレッド・ページについては、新井直之『戦後ジャーナリズムの断面』双柿舎、1984年、新井、前掲書、1979年、などを参照。
- 8) 『中部日本新聞』1951年1月1日。
- 9) この点に関しては、中日新聞社、前掲書、1987年、352—5頁を参照。ちなみに『中部日本新聞』は、1952年に中日文化賞を制定したが、その体育部門の選考は、「中部スポーツマンスクラブ」の推薦によって行われていた。
- 10) 「国体キャンペーン」に関しては、観行、前掲論文、2002年、186—8頁を参照。
- 11) 愛知国体における開催地域行政・財界の関与の状況に関しては、同上論文、184—6頁を参照。
- 12) スポーツ界の国際復帰に関しては、関春南『戦後日本のスポーツ政策』大修館書店、1997年、107—10頁を参照。全米水泳選手権大会に関しては、高杉良『祖国へ、熱き心を 東京オリンピックを呼んだ男』新潮文庫、2001年、8—130頁、産経新聞「戦後史開封」取材班編『戦後史開封 スポーツ・文化編』産経新聞社、1999年、32—54頁を参照。
- 13) 当時の経済状況に関しては、岩本純明「日本経済の改革と復興」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史17現代1』東京大学出版、1985年、77—106頁を参照。
- 14) 丸山真男「日本におけるナショナリズム—その思想的背景と展望」『中央公論』1951年1月号、『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、1964年、152—70頁。
- 15) 同上書、167頁。
- 16) 同上書、168—9頁。
- 17) 観行、前掲論文、2002年、181頁。
- 18) この点に関しては、坂上康博『権力装置としてのスポーツ』講談社選書メチエ、1998年、を参照。
- 19) ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて 上』岩波書店、2001年、220頁。
- 20) 愛知国体と当時の外交政策と関連については、観行、前掲論文、2002年、183頁を参照。
- 21) 民主化政策とスポーツについては、関、前掲書、1997年、87—9頁を参照。
- 22) この点に関しては、ダワー、前掲書、上、2001年、276—278頁を参照。

- 23) この点に関して草深直臣は、「ルールを守る」ことに先駆けて「ルールを制定する」という精神がなく、またルールの正当性と審判の妥当性の根拠と内容は捨象されており、「審判の絶対性と支配を面的に強調するスポーツマンシップは、資本主義国家の階級支配として有効なイデオロギー」になっていき、さらにそれは、「物言わぬスポーツマン」「奉仕と責任感あるスポーツマン」をイメージアップさせ、やがて、社会的諸矛盾から目を蔽う「従順な国民」像への期待と結合していく」と述べている（草深直臣「現代日本の社会体育行政の展開と課題」『立命館大学人文科学研究所紀要』第39号、1985年、17頁）。
- 24) 「安全弁」「ガス抜き」としての側面に関しては、観行、前掲論文、2002年、186頁を参照。
- 25) 1950年8月30日にI O Cへの復帰が認められた。
- 26) アマチュアリズムについて1950年11月12日号『サンデー毎日』の「スポーツは楽しむもの国民体育大会に寄せて」という記事には、スポーツ競技とレクリエーションに違いはなく、スポーツをやることの第一義は楽しむことであり、スポーツのグループにある社交的な雰囲気こそがアマチュアリズムの神髄であると書かれている。
- 27) 特に、地域版（市内版・尾張版・半田版など）の中で地域密着型の報道が行われた。
- 28) 『中部日本新聞』（市内版）1950年10月7日。
- 29) 『中部日本新聞』1950年9月24日。
- 30) また、10月10日の『朝日新聞』（市内版）には、名古屋市大須の各商店街で道路交通法に違反していた国体の歓迎装飾が特別に許可されたという記事が掲載されており、商店街自体が国体に自主的・積極的に関わっている姿勢が強調されている。
- 31) 愛知国体では、国体マークを利用するお土産品が会場地に見られるようになった（都道府県体育競技会連絡協議会『国民体育大会の歩み』1978年、126頁）。
- 32) 『東海毎日新聞』1950年9月26日。
- 33) 観行、前掲論文、2002年、180－2頁。
- 34) 同上論文、182－3頁。
- 35) 「天皇制民主主義」に関しては、ダワー、前掲書、下、2001年、3－108頁を参照。
- 36) 『中部日本新聞』1950年10月23日。ちなみに、当日の新聞は、全4面のうちの2・3面が秋季大会の概要に関する記事になっており、この記事は、秋季大会のガイドブックとして位置づけられていたと思われる。
- 37) 『中部日本新聞』1950年10月25日。
- 38) この点に関して中村敏雄は、戦後の体育・スポーツ界が、戦前・戦時中におけるスポーツの戦争責任に関する自己批判を欠如しており、また多様性を認めない不寛容の態度や封建的・保守的な側面が継続されていたことを指摘している（中村敏雄「戦後のスポーツナショナリズム」中村敏雄ら編『スポーツナショナリズム』大修館書店、1978年、179－202頁）。
- 39) このような天皇と新聞社についての言説は、その他の記事（「本社の喜び」『夕刊 中部日本新聞』10月29日（28日発行）及び「両陛下をお迎えして」本社社長・杉山虎之助『中部日本新聞』10月29日）の中で繰り返されている。
- 40) この点に関しては、観行、前掲論文、2002年、186頁を参照。
- 41) これらの言説は、大会期間中や開催後においても様々な記事を通じて繰り返し強調された。例えば、10月31日『中部日本新聞』の「中日春秋」というコラムでは、スポーツが現代社会の指標であり、国体がひとつの現代哲学であると述べられている。また、11月2日『中部日本新聞』における大会の「総括」では、「天皇杯」と「開会式での入場行進」に関する批評を通じてスポーツの民主主義・個人主義の側面や秩序維持などを強調している。
- 42) 都道府県体育競技会連絡協議会、前掲書、1978年、126頁
- 43) 同上書、165－6頁。
- 44) しかし、『中部日本新聞』では、この開会式的情景よりも、むしろ本社への「御視察」の記事を大々的に掲載している。それは、『中部日本新聞』が、「右傾化」を進めて権力の意図を代弁しながらも、当時の激しい販売競争の中で、その

「御視察」を自社の販売戦略の一環として位置づけていこうとする、企業体としての『中部日本新聞』の姿勢が示されたものだったと考えられる。それゆえに、ここには、『中部日本新聞』が権力に直結していたわけではなく、様々な力関係の中で記事の選択を行っていたことを表していると思われる。

45) 丸山, 前掲書, 1964年, 166頁。

46) 「国体」に関しては、橋川文三『橋川文三著作集2』筑摩書房, 2000年, 99－119頁, 鶴見俊輔『戦時期日本の精神史 1931～1945年』岩

波現代文庫, 2001年, 53－73頁, 姜尚中『ナショナリズム』岩波書店, 2001年, 54－87頁を参照。また, 「家族国家」に関しては, 藤田省三『藤田省三著作集1 天皇制国家の支配原理』みすず書房, 1998年, を参照。

47) 姜, 前掲書, 2001年, 88－99頁。

48) 「逆コース」の動きと, それに対する民衆の抵抗に関しては, 渡辺治『現代日本の帝国主義化』大月書店, 1996年135－196頁を参照。

49) この点に関しては, 観行, 前掲論文, 2002年, 182頁を参照。

Roles of Aichi National Athletic Meet in Postwar Nationalism — Discourses and Ideology Manipulation by Chubu Nihon Shimbun —

KANGYO Tomonobu *

Abstract: Chubu Nihon Shimbun exerted a great influence on the residents of Aichi Prefecture. On the occasion of the Aichi National Athletic Meet in 1950, the paper posted discourses that reflected the authorities' intention to unite the people and to further promote nationalism. The authorities used the paper to manipulate ideology and obtain people's voluntary consent to support the then ruling structure. Various kinds of concepts and ideas were connected with each other to support the authorities' philosophy. At first, people were made to believe that sports and the National Athletic Meets were “good things” and “most suitable to the new society.” The government aimed to encourage Aichi residents to support the National Athletic Meet. They instilled the concept of “goodwill and service” into the residents to obtain their voluntary involvement in the Meet. Secondly, the three concepts of “sports: healthy culture,” “democratic society,” and “emperor as a symbol” were closely related to each other in discourses. Using the concept of “sportsmanship of fair play,” the government hoped to build a voluntary consensus among the people. In addition, with the intention of using the people's enthusiasm for sports to boost postwar nationalism, the authorities nurtured a “national polity” consciousness among the people, which was considered to appropriately fit the postwar ruling structure. Based on this consciousness, the authorities successfully developed a “national polity” nationalism via two concepts of “peace” and “democracy.”

Keywords: Aichi National Athletic Meet, nation state, nationalism, emperor, ideology manipulation, voluntary consensus

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University